

カールグレン「Compendium」を読む(2)

中村雅之

1. 有声音声母の帯気性

カールグレンは、並母・群母・定母などの全濁音声母が有聲破裂音であることはすでに100年も前に(つまり19世紀半ばに)Edkinsによって明らかにされていることを述べた後、次のように記している。

【220頁第28行】しかし、g-、d-、b-という再構成で必ずしも万全というわけではない。上述のように、中古の全濁音声母は、北京語において、平声では無声有気(挙例は省略---中村)になり、他の声調では無声無気(挙例は省略---中村)になっている。また、客家方言では、中古の全濁音は全て無声有気になっているのである。中古音からban > pan > p'anという変化を仮定するのは不可能である。なぜなら、いつの時代にも(般panのような)p-が同時に存在しており、一方のpanがそのまま残り、他方の(b-に由来する)panのみがp'anへと変化する可能性は排除されるからである。さらに、直接にb > p'という変化が起こる可能性も、音声学的にすこぶる低い。したがって、中古音としては

g'-、d'-、b'-、dz'-

という有聲有気音を再構成しなければならない。客家方言では帯気性は保存されたが、有聲音から無聲音になり、おしなべて「k'-、t'-、p'-、ts'-」のようになった。官話では、まず帯気性は平声では保存されたが、他の声調では失われ、

(平声)g'i、d'an、b'an、dz'ien

(去声)gin、ding、bing、dzai

さらにその後、有聲音が無聲化した。

(平声)k'i、t'an、p'an、ts'ien

(去声)kin、ting、ping、tsai

中古音の再構音価は

k-、k'-、g'-、ng-

t-、t'-、d'-、n-

のようになるが、「k-、k'-、g'-」があつて、普通の「g-」がなく、また「t-、t'-、d'-」があつて、普通の「d-」がないというのは、奇妙に感じられるかも知れない。しかしこの理由は、後述するように、上古音では4種の音「k-、k'-、g-、g'-」や「t-、t'-、d-、d'-」を全て持っていたのだが、無声の「g」と「d」は中古音に至る前に消滅したのである。

中古音の全濁音(=有声音)声母においては音韻論的に有気と無気の対立がないので、現在ではその帯気性が論じられることはほとんどない。しかし、中古音の有声破裂音(および破擦音)が音声として有気音であつたか無気音であつたかというのは探求に値する問題である。無声化に際して、有気音になるか無気音になるかが方言によって異なることが問題を複雑にしている。

カールグレンによれば、中古音の有声音は初めは全て有気音だったが、ある段階で上声・去声・入声において無気音になったという。中古の全濁音が現代諸方言中、客家方言では全て無声有気になっているが、官話系方言では平声で無声有気、他の声調で無声無気になっていることを勘案しての結論である。

これに対して、Maspéro(1920:pp.29-36)は、漢訳仏典におけるサンスクリット語の音訳漢字を調査して、7世紀以前には漢語の有声音は無気であり、8世紀以降に有気音になったと結論づけた。古い仏典ではサンスクリット語の有声無気を表すのに漢語の全濁音字が用いられていたのに対して、8世紀以降にはサンスクリット語の有声有気の方に漢語の全濁音字が用いられることからの推論である。

二つの論は全く相容れないように見える。

カールグレン:有聲有気>(平声以外で)有聲無気

マスペロ :有聲無気>有聲有気

上に引用したように、カ氏の説は上古音の推定音価とも密接に関わっている。つまり、上古音においては、有声音に有気と無気の両種があつたとされている(228-229頁、273-276頁)。具体的には、上古音では有気音「d'、g'」のほかに無気音の「d、g」があつたが、「d」は中古音に至るまでに脱落して喻母4等になり(陽:**djang* > *jang*)、「g」は喻母3等になった(王:**g'iwang* > *jiwang*)のだけという。これは例えば、「王」が喻母3等であるのに、声符として「王」を持つ「狂」が群母(*g'iwang*)であることを説明するのに有効である。上古音の「*g」が喻母3等になり、「*g'」が群母になったというのは、カールグレンの所説の中でも最も巧妙な

部分と言える。

しかし、対音資料に基づいたマスペロの説は説得力があり、カールグレン説の成立を阻んでいる。また、両氏ともに、有気から無気へ、あるいは無気から有気へという変化がなぜ生じたかという点には触れていない。これらについて、以下にいくつかの仮説を提示してみたい。

2. 帯気性保持と調値の関連

カールグレン、マスペロ両氏が触れなかった問題として、多くの現代方言に見られる無声化の状況（平声で有気、他の声調で無気）がいかなるメカニズムで形成されたのか、という問題がある。カールグレンが考えたように、無声化の前段階として、平声で有声有気音、他の声調で有声無気音である段階を想定しなければならない。それではそのような段階はいかにして生じたのか。私見では、調値の違いがこの状況をもたらしたと見なすのが妥当であろうと思う。唐代長安音において、平声は最も低い調値であり、有声の氣息を伴っていたが、他の声調はおおむね高い調値であったため、いくぶん喉の緊張を伴い、有声の氣息がほとんど出なくなった、と考えられる。

唐代音の調値については、従来から声明、古写本の声点、文献の記述などを利用した金田一春彦(1951)によって、平声(とりわけ平声濁音)が低調、上声が高調、去声が上昇調、入声が短促調という調値が想定されていたが、高山倫明(1981)はそれに更なる裏付けを与えた。『日本書紀』古写本の声点を調査した高山氏は、唐代長安音を利用した万葉仮名が用いられている部分(いわゆる α 群)の歌謡において、低調を表す声点が平声字に付され、高調を表す声点が上声字・去声字に付されていることを明らかにした。状況証拠を丹念に集めた金田一(1951)の所論が、ここで信頼に足る対音資料を得たわけである。

過去の自説を簡潔にまとめた金田一(1980)では、平声と他声調を「平仄」という対立でとらえる現象について次のように付言している。

平とは低く終わる声調のことである

仄とは高く終わる声調のことである

つまり「平仄」は「低⇔高」の対立だというのである。中古音の有声音が官話系方言などにおいて、平声では無声有気になり、仄声では無声無気になっているのも、その調値が要因であったと考えられる。

3. カールグレン説とマスペロ説の統合

カールグレンは、中古の有声音が全て無声有気になっている客家方言の存在から、中古の有声音を有気音と結論づけたのであるが、マスペロによれば『切韻』の時代には有声音は無気音であったことになる。両者の論は一見、相容れないように見えるが、この点についての解決はさほど難しくはない。中古の有声音は初め無気音であったが、7世紀頃を境に有気音へと変わったと考えればよい。さらにその後、仄声においてのみ、また無気音に変わったのは、上述したとおりである。問題は、唐初に有気音化した要因であるが、その説明の前に考えるべき問題がある。

『切韻』(およびそれ以前)の時代に、有声破裂音が無気音だったとすると、カールグレンが想定した喻母の上古音はどうなるのか。この問題も容易に解決する。カ氏の喻母3等(*g>j)と喻母4等(*d>ゼロ)における上古音を、それぞれ「*g'」「*d'」のように有声有気に修正すればよい。これによって上古音に「k/k'/g/g'」のような破裂音の四項対立があったというカールグレン説の根幹は変更せずに済む。しかも、喻母の上古音を有声有気と推定した方が、摩擦音化し、消滅した過程を説明しやすい(*g'i- > ɣji- > ji-)。

先に保留した問題であるが、唐初に有声の無気音がなぜ有気音に変わったのか。これはおおむね次のような事情によると思われる。

- ① 上古音ではカールグレン説のように「k/k'/g/g'」のような四項対立だった。
- ② 中古音までに有声有気が消滅し、「k/k'/g」の三項対立になった。
- ③ 有声有気音「g'」が消滅したことにより、有声音は有気と無気の対立を失った。その結果、それまでの有声無気音が徐々に氣息を伴うようになった。
- ④ その傾向は、唐代長安音における非鼻音化(ŋ>ŋg)の進行に伴って、ますます顕著になった。つまり、「g>g'」の変化により、有声無気の位置に空き間ができたため、それを埋めるように非鼻音化が起こり、それを受けて、「g>g'」の変化がさらに進行し、完成した。

この後には、すでに述べたように、次の変化が続くことになる。

- ⑤ 低い調値をもつ平声有声音は帯気性を保ったが、高い調値をもつ仄声有声音は帯気性を失い、有声無気になった。
- ⑥ 唐代中期までには有声音は全て無声化した。

以上であるが、この仮説はあくまでもカールグレンとマスペロの説を最大限に

重んじた場合のものであり、新たな解釈が生まれる可能性を排除しない。とりわけ、客家方言における状況(有声音>無声有気音)を唐代長安音に直結しない個別の例を見なす場合には、より単純な解釈が可能である。ましてやカールグレンの上古音説を取らない場合には、さらに別の解釈を試みることになるが、今はこれ以上踏み込まないでおく。

<参考文献>

H. Maspéro(1920)“Le dialecte de Tchang-ngan sous les T’ang(唐代長安音考)”, *Bulletin de l’Ecole Française d’Extrême-Orient* 20:1-124

金田一春彦(1951)「日本四声古義」(金田一2005所収)

金田一春彦(1980)「日本語のアクセントから中国唐時代の四声値を推定する」(金田一2005所収)

金田一春彦(2005)『金田一春彦著作集』第9巻、玉川大学出版部

高山倫明(1981)「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」『語文研究』第51号